

私の履歴書

前まえ
橋はし
汀てい
子こ

「そんな生半可な気持ちで界が来る。もっと幅広い知識バイオリンを勉強してきたのを得た方が演奏にもプラスになるに違いない。私は生意気ごとく怒った。桐朋学園「子にもそんなことを考えた。」

ます。その理由として……」と書き出し、当時の思いを切々とつづっている。

自分も将来は演奏家になりたいのだが「演奏家に不足している、その何か足りないx

先生にはよく怒鳴られてきたが、こんなに激怒されるとは思っていなかった。

「音楽見渡す」学び期待

小澤征爾さんの伴奏で試験

子供のための音楽
教室の生徒は中学を
卒業すると、ほとんどが桐朋
女子高等学校音楽科に進ん
だ。周囲の誰もが、私もそう
するものと思っていた。

た。相談ではなく、報告だった。先生は「バイオリンは片手間でやるつもりか」とかんだ。私は「でも、うちで桐朋の授業料を払えないと思います」と抵抗したが、先

(エックス)の大事な線を見つけたため」に指揮科で学びたいと訴えたのだ。「音楽を全体から見渡す」総合芸術。私はそんなことを指揮科で学べると期待していた。

生は「では、奨学金を出す。それでいいな」と押し返した。おかげで今の私がある。

後の経緯は忘れてしまったが、結局は桐朋の弦楽科に通うことになった。

高校の普通科に行こうと思ったのだ。音楽学校で演奏の技術だけを学んでも、いずれ限

桐朋女子高等学校への入学を間近に控えた1959年3月10日の日記に、私が斎藤先がぼやいた。桐朋の試験では「こんな難しい曲、おれは弾けねえよ」。小澤征爾さん

たが、まさにそれを代表する
コンチェルトだと思つ。
コンチェルトは本来、独奏

彼女との交流については、い
ずれ回を改めて述べることに
したい。(バイオリニスト)

はない。斎藤先生が「きれいに弾くだけが音楽ではない」と折に触れておっしゃっている。

ピアノの部の1位特賞は子供のための音楽教室ですと一緒だった中村絃子さんだ。



オーケストラの練習に励む筆者

フィンランドの作曲家シベリウスは20世紀初頭、ロシア

曲に秘めた思いを見事にピアノで表現した。さすがは名指揮者だ。それにしても天下の

小澤さんに伴奏を頼む
なんて、ぜいたくな環
境にいたものだ。

高校1年の時、クラスそろって楽壇の登竜門、日本音楽コンクールを受けにいった。学生ではなく、一般のコンクールだ。私はバイオリン部門で2位特賞だったが、1位特賞は同級生茶倫匡さん。ちよっと悔しかった。

その部の1位特賞は子
のための音楽教室ですと
なった中村絃子さんだ。

この交流については、い
図を改めて述べることに
い。(バイオリニスト)